

光 文 社 時 代 小 說 文 庫

伊東一刀齋

中

長編剣豪小説

戸部新十郎





光文社文庫

書下ろし／長編剣豪小説

伊東一刀斎（中）〈念の章〉

著者 とべ しんじゅうろう
戸部新十郎

1989年12月20日 初版1刷発行

発行者	大坪昌夫
印刷	大日本印刷
製本	大日本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Shinjūrō Tobe 1989

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71067-0 Printed in Japan

文庫書下ろし／長編剣豪小説

伊東一刀斎(中)

この作品は光文社文庫のために書下ろされました

伊東一刀齋

中卷
念の章

目次

菖蒲しやうぶ

七

燕返し

三八

恋こいわたる君

六二

女城主

九三

濔み標おつし

一三三

あづま路

一五三

鞠まり

一八五

領ひ巾れ

二三二

野望の峠

二五四

無想劍

二八六

菖蒲しょうぶ

一

京の夏は、菖蒲とともにやってくる。

五月五日の節句が近づくと、京の市人は火難・災難除けに、菖蒲をもって屋根を葺ふきはじめる。そうでなくても、軒や庇ひさしに差す。

また、息災を祈って、菖蒲湯に入り、菖蒲酒を飲み、菖蒲枕をして寝る。強い匂いの菖蒲ひといろ、といった状景である。

菖蒲はさらに、“尚武”に通ずる。賀茂の社では古式にのっとりた競馬、流鏑馬やぶさめが奉納されるが、鴨川の河原で盛大にくりひろげられるのは、

〈印地打ちいんじ〉

である。

東西に分かれ、石つぶてを投げ合い、勝負を決める石合戦のことだが、本来、その年の豊凶

を占うものだった。それがしだいに激しくなり、武器、得物までもち出すようになった。

四年前の永禄四年のこと、来日していたイエズス会の宣教師、ガスパル・ビレラは、この印地打ちについて、こう報告している。

かの催しは、五月に行なわれる戦鬪の祭りなり。昼食後、望む者はみな武器をとり、背に偶像を描きて野に出で、二隊に分かる。第一に少年投石し、ついで弓および鉄砲を用い、さらに槍が出、最後に剣をもつて闘う。

多数の人、負傷し、常に数人の死者を出す。しかれども、この日は特権ありて、これがため罰せらるることなし

誇張はあるだろうが、ほとんど合戦に擬した武闘技になっていることがうかがえる。

このところ、新陰流を創はめた上泉伊勢守信綱こういずみいせののかみのぶつなが入京していた。昨年、大和柳生庄やましなときつぐの柳生宗厳むねのもとに滞在中、伴秀胤ひでたねが下総で陣没したという悲報を受けたので、いったん東国へ下り、心を新たにせず柳生庄へ行き、それから入京したものである。

滞在先は、山科言継卿やましなときつぐのところだった。じつは、言継の縁辺から故秀胤の室がきていて、姻戚関係になる。

言継は親しみをこめ、伊勢守のことを、

〈舅どの〉

と呼ぶ。

同年で、ともに五十九歳である。ただし、言継は年相応にくすんでいるのに対し、信綱は血色よく福々しかった。

こんどの上京はほかでもなかった。言継の斡旋で、將軍足利義輝に小笠原流軍配ぐんぱいを講じ、かつ新陰流兵法を上覧に供するためである。

「ようおじやった。なにせ、兵法数奇の公方くほうさんやから、まだかまだかとの催促がきつうおじやってな」

と、言継は信綱一行を迎えた。

一行といっても、供は言継の顔見知りの鈴木意伯と、いま一人まるまるとした赭あから顔の若者の二人だった。

「この仁、九州人吉ひとよしから見えた丸目蔵人佐まるめくらんどのすけと申します。よう出来ます」

信綱はその見知らぬ若者を紹介した。信綱の名を慕って、はるばるやってき、入門したものと思われた。朴訥ぼくとつで、なかなか力が強そうである。

「拙者、丸目蔵人佐長恵ながよしでござす」

と、表情とはあまり似つかわしくない疳高い声を張り上げ、肩肘張って丁重すぎる挨拶をした。

いま畿内には、信綱の取り立てた直門が四十人ばかりいる。伊勢の国司北畠具教はじめ柳生宗厳、奈良の宝蔵院胤栄など、大名や豪族、かねて兵法の名のあった者で、いずれも新陰流弘布のため、あずかって力になる人たちである。

それに較べて、丸目蔵人佐のような地方武士の直門は珍しい。よほど出来るか、見所があつて可愛がつているものと思われた。

もつとも、信綱は人を賞めることがあつても、悪口はついぞいったことがない人物である。言継はその言葉のまま、

「そうですか。ようお出来になるそうな」

というと、蔵人佐は赭ら顔をさらに赤くして笑つた。

なにか泣き顔に見えた。平生、あまり笑い慣れていないのだろう。

「で、皆さん方はどうされた」

「はい、神後伊豆は途中より、また柳生に残しておきました。疋田文五郎はつい先日、それぞれ廻国の途につかせました」

と信綱は答えた。

いずれも門弟に違いないが、はじめから信綱につき従つていて、どちらかといえば、新陰流草創の同志といったほうがいい。だから、*“皆さん方”*である。

じつさい、かれらは足跡諸国にいたらざるなく、新陰流の弘布普及につとめた。俗称だが、

それぞれ神陰流、正田陰流とよばれて各地に伝わった。

「新陰流はいよいよ盛んでおじゃるな。ではなにはともあれ」

と、言継はいたずらっぽい口調でいった。

「舅どのはいけぬ口でおじゃるが、まずは一献」

じつは言継が飲みたいのである。かれは酒好きで、来客があればむろんのこと、訪問先でも酒がなくては落ち着かない。酔っぱらって、御所勤めを休んだこともしばしばだった。

すぐに酒肴が出た。酒の飲めない信綱には、節句時期らしく粽ちまきである。

このころの粽は竹の葉でなく、茅ちがやの葉で包まれるのがふつうだった。信綱はその茅を丁寧に解きながら、言継らの酒盃に合わせて、ゆるゆると食べた。餅は好きなほうである。

「柳生といえば、かの仁もさぞかし上達なされたろう」

と言継がいった。

宗巖のことである。その名はぼつぼつ京にまで聞こえていたが、ことに言継は早耳だった。

山科家は羽林家うりん（最高位大納言にいたる家柄）の一つだが、ある時期から内蔵頭くらのかみとして禁裏きんりの出納を管理し、また御厨子所別当みずしじょうとして帝の膳部を調進した。そのため、公おおやけの帳簿とは別に、手控えの日々の記録が必要になった。

つまり「日記」である。その記述が代々、仕事のようにして続いている。自然、世の中の出来ごとや噂に、人より敏感なのだった。

「その通りです。めざましい進境でありますな。正田はもはや手向かいならぬと申しますし、げんにこの鈴木意伯を立ち合わせましたところ、まず五分以上でありました」

「それは見事な」

「はい、見事です」

「いくつになられた」

「三十五歳と聞いています」

「これからでおじやるな。末頼もしい」

「されば、印可状を贈りました」

与えた、とはいわない。師をしのぐ資質をひそめているかもしれない後生こうせいの人たちには、あくまでも贈って励ますつもりである。

それも一国唯授一人の印可状だった。

それがし、幼少より兵法兵術に志あるによって、諸流の奥源を極め、日夜工夫鍛練致すによつて、尊天の感応こうむを蒙り、新陰流を号す。

天下に出いして伝授せしめんため、上洛致すところ、不慮に参会申し、種々御懇切御執心、その計らい謝し難く候間、一流一通りの位、心持一つも残さず、相伝あいづたえもうし申候”

というもので、

「なおなお、この上、御鍛練しかるべく候」
との追記がある。

信綱自らの新陰流にいたった経緯を述べ、柳生滞在中の謝意を表しているあたり、懇切丁寧な印可状である。

「なお、公案を一つ、置いてきました」

「どんなものです」

「無刀にして勝つ法」

「ほう」

言継は大げさに唸^{うな}った。

「そんなことが出来ますのか」

「容易ではありませんまい。が、無刀にして勝つ法は、兵法究極の目標であります。むろん、手前が到達していて、返答を求めたものではありません。この目標に到達すべく、相ともに考えて行きたいのです」

謙虚で、淡々とした話しぶりだが、じつは信綱にはこの“無刀にして勝つ法”のおよそがわかりかけている。その根本は、

〈太刀^{たち}間の定理^{じょうり}〉

というところにある。

これは単なる間合いではない。相互に当たる、当たらないの相對關係を超越したものである。働きはそして、

〈まろばし転〉

である。

一切の構えを解き放ち、身も心も太刀も一つになって、円球が盤上を転ずる如く、円転自在の位をいう。さらにいえば、相手の好むところに従い、わが身を相手にまかせ、そして勝つ。その究極が無刀にして勝つ法だと、信綱は考えている。具体的には、手で捉え、奪刀し、組み伏せて制圧することになるが、形を作るのではない。いつ、いかなるときでも、対応でき、勝ちとる身と心を備えねばならないのである。

そんな工夫、研究を、ともに続けて行きたいものだといっている。

「舅どのは、見えられるたびに大きくなる」

「そうではありませぬよ。つぎつぎ出来物が出て参りますので、ついついこちらも勉強になるのです」

と、信綱はあくまでも謙虚だった。

「なるほど、後生畏るべし、でおじやるな」

言継はこういって、盃をあけた。

「そういえば、京にも近ごろ、兵法で名をあげた者がおじやる」

「面白そうな話ですな」

「舅^{みまさか}どのは、美作の住人で宮本無二斎という兵法者をご存じか」

「名だけは聞いています。当理流と申し、二刀を遣うお方でありましょう」

さすがに兵法者の消息に詳しい。そんな知識もまた兵法者の心得である。

「さようさよう。いっぽう吉岡憲法、これはご存じでしょうな」

「はい。お眼にかかったことはありませんが、將軍家御指南と聞いています」

「その憲法どのの件と無二斎どのが、松永弾正どのの面前で立ち合った」

「どうなりました」

「無二斎どのが勝ちました」

「憲法どのではないのですな」

信綱は念を押していった。

「それにしても、無二斎という仁は強いお方ですな」

「ところが、新たな立合い者が出てきて、勝った無二斎どのを破ってしまった」

「どなたです」

「伊東弥五郎」

「はて」